

## 〈新刊紹介〉

### 西崎亨著『国語の史料研究点描』

本書は、著者のこれまでの研究論文のうち、単行本に収録されていない19編の論文がまとめられたものである。

本書の構成と所収論文数は以下の通りである。「第一章 濁音符二種「〇〇」「—〇〇—」の交用の古点本」は6論考、「第二章 国語アクセント資料の一斑」は7論考（6論考にまとめられている）、「第三章 『遊仙窟』の訓点一斑」は3論考、「第四章 『成実論』天長点の加点の一面」は3論考を、それぞれ所収する。巻末に「初出一覧」、「あとがき」、「著者略歴」を付す。（前田直子）

（2018年5月31日発行 おうふう刊 A5判縦組み 404頁 30,000円＋税 ISBN 978-4-273-03817-5）

### 遠藤織枝編『今どきの日本語——変わることば・変わらないことば——』

本書は、編者である遠藤織枝氏らによって立ち上げられた現代日本語研究会による研究成果の一つ『談話資料 日常生活のことば』（ひつじ書房、2016年）で公開された談話資料を分析することによって得られた、日常の話しことばのなかで「なんとなく」気になる12のトピックスに関する知見を非専門家にもわかりやすく論じたエッセイ集である。

「はじめに」に続き、「ことば編」には「第一章 江戸時代から生きてきた「やばい」の今（遠藤織枝）」、「第二章 強調表現 メッチャからスンゴイまで（遠藤織枝）」、「第三章 「すごいきれい」はほんとうに「すごい」のですか？（孫琦）」、「第四章 「とか」の勢いはとまりません（増田祥子）」、「第五章 「夫婦のことば」ちよっとのぞき見（小林美恵子）」、「第六章 超高齢社会のことば（遠藤織枝）」、「第七章 消えた?! 日常会話の性差・世代差（本田明子）」が、「コミュニケーション編」には「第八章 「この本、おもしろいってうか」という心理（中島悦子）」、「第九章 「クレームつけるぞ」を「クレームつけるぞ、みたいなの」という心理（中島悦子）」、「第十章 コミュニケーションの極意1——ほめと、ほめへの応え方——（高宮優実）」、「第十一章 コミュニケーションの極意2——頼みたいけど頼めないあなたへ——（高橋美奈子）」、「第十二章 コミュニケーションの極意3——会話に笑いを——（佐々木恵理）」が収められており、末尾には「参考文献」、「索引」、「執筆者紹介」が付されている。（田中佑）

（2018年6月15日発行 ひつじ書房刊 四六判縦組み 236頁 1,600円＋税 ISBN 978-4-89476-923-6）

### 李英蘭著『「主題—解説」構造から見た韓国語 -n kes-ita と日本語ノダ』

本書は、筆者が2016年に東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻に提出し

た「現代韓国語の「-n kes-ita」文に関する考察：「主題—解説」構造の観点から」に加筆修正を加えたもので、韓国語の -n kes-ita 文を「主題—解説」構造の観点から考察し、kes-ita の基本的機能とその全体像について論じたものである。また、kes-ita 文とノダ文を対照することで、両形式の類似点と相違点にも考察を加えている。

本書は、「はしがき」,「凡例」に続く、「I kes-ita 文（第1章から第8章）」と「II kes-ita 文とノダ文（第9章から第12章）」の二部構成。「第1章 kes-ita 文の基本的理解」,「第2章 名詞性の度合いから見た kes-ita 文」,「第3章 「主題—解説」構造」,「第4章 名詞文としての kes-ita 文」,「第5章 疑似名詞文としての kes-ita 文」,「第6章 非名詞文としての kes-ita 文」,「第7章 二次的な意味が現れる kes-ita 文」,「第8章 kes-ita 文の意味解釈のプロセス」,「第9章 ノダ文の基本的理解」,「第10章 kes-ita 文とノダ文との比較」,「第11章 kes-ita と他の日本語との比較」,「第12章 課題と展望」の12章が収められる。末尾に「参考文献」,「用例典」,「付録 用例数のまとめ」,「索引」を付す。

なお、本書は東京大学韓国学研究部門の「韓国学中央研究院・海外韓国学中核大学育成事業 東京大学韓国学研究者育成事業学術成果刊行助成制度」による刊行助成を受けている。（阿久澤弘陽）

（2018年6月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 280頁 6,800円+税 ISBN 978-4-89476-910-6）

### 川原繁人著『ビジュアル音声学』

本書は、「目で見て」音声学が理解できるようたくさんの図・グラフ・表が用いられている、音声学の基礎を網羅した入門書である。また、最新の音声学の知見も紹介されている。

本書の構成は、「1 序章」,「2 調音音声学」,「3 音響音声学」,「4 知覚音声学」,「5 終章」で、随所に練習問題や息抜きのためのトピックが掲載されている。末尾に、「主要用語索引（英語訳付き）」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年7月10日発行 三省堂刊 A5判横組み 240頁 2,300円+税 ISBN 978-4-385-36532-9）

### 定延利之編『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』

本書は、近年、さまざまな分野で取り上げられている「キャラ」もしくは「キャラクター」に関する国内外の研究成果、特に、日本語文法学会第16回大会パネルセッション、日本語学会2016年度秋季大会ワークショップ、国際語用論学会第15回大会パネルセッションにおける研究成果をまとめ、分野や立場を超えた新たな展開を呼び込もうとするものである。

「序」に続き、「第1章 さまざまなキャラ」には「キャラ論の前提（定延利之）」,「日本語コーパスにおける「キャラ（クター）」（イレーナ・スルダノヴィッチ）」が、「第2

章 物語世界のキャラ論」には「キャラクターとフィクション——宮崎駿監督のアニメ作品、村上春樹の小説をケーススタディとして——（金水敏）」、「『属性表現』再考——「複合性」「非現実性」「知識の共有」から考える——（西田隆政）」、「言語のキャラクター化 遊戯的翻訳と引用（野澤俊介）」が、「第3章 現実世界のキャラ論」には「日本語社会における「キャラ」（定延利之）」、「ブルデューの「ハビトゥス」と定延の「キャラ」との出会い（アンドレイ・ベケシュ）」、「若者たちのキャラ化のその後（瀬沼文彰）」、「直接引用とキャラ（金田純平）」が、「第4章 キャラ論の応用」には「方言における自称詞・自称詞系文末詞の用法——キャラ助詞とのかかわり——（友定賢治）」、「日本語教育とキャラ（宿利由希子）」が収められており、末尾には「索引」、「編者・執筆者紹介」が付されている。（田中佑）

（2018年7月10日発行 三省堂刊 A5判横組み 256頁 3,200円＋税 ISBN 978-4-385-34913-8）

### 李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子著『新・日本語教育のためのコーパス調査入門』

本書は、同著者による『日本語教育のためのコーパス調査入門』（くろしお出版、2012年）に、コーパスを利用した日本語教育研究の豊富な事例、および、独自のコーパス調査を立案・実施する方法を加筆し、修正を施したものである。

「はしがき」、「第1章 コーパスを知る」に続き、「第1部 日本語均衡コーパスの活用」には「第2章 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」入門」、「第3章 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いた言語調査入門1」、「第4章 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用いた言語調査入門2」が、「第2部 教材コーパスの構築と活用」には「第5章 教材コーパスの構築」、「第6章 教材コーパスの活用1——テキストエディタの活用——」、「第7章 教材コーパスの活用2——形態素解析——」、「第8章 教材コーパスの処理1——Excelを用いた語彙表の作成——」、「第9章 教材コーパスの処理2——Excel関数の利用——」が、「第3部 学習者コーパスの構築と活用」には「第10章 学習者コーパスを知る」、「第11章 学習者コーパスの構築」、「第12章 学習者コーパスの検索」が、「第4部 日本語教育とコーパス」には「第13章 日本語教育支援としてのコーパス」、「第14章 コーパスでかわる日本語教育」、「第15章 調査結果の報告」が収められており、末尾には「巻末付録：リンク」、「参考文献」、「索引」が付されている。（田中佑）

（2018年7月15日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 304頁 2,400円＋税 ISBN 978-4-87424-771-6）

### 小林祥次郎著『女のことば 男のことば』

本書は、さまざまな女の社会・男の社会におけることば、特に江戸時代以前の文献に現れる隠語を中心に取り上げ、そこに見られる創造者の精神やユーモアに関する考察を通じて、日本語の新たな一面に光を当てようとするものである。

「女のことば 男のことば——序にかえて——」に続き、「女のことば」には「一 忌み言葉」、「二 斎宮忌み言葉」、「三 月経」、「四 正月言葉」、「五 女房言葉」、「六 郭言葉」が、

「男のことば」には「一 武者言葉」, 「二 武士の言葉」, 「三 奴言葉・六方言言葉」, 「四 せんぼう」, 「五 山言葉」が収められており, 末尾には「あとがき」, 「索引」が付されている。(田中佑)

(2018年7月20日発行 勉誠出版刊 四六判縦組み 300頁 2,000円+税 ISBN 978-4-585-28043-9)

### 池玟京著『接続表現の多義性に関する日韓対照研究』

本書は, 筆者が2017年に東京大学に提出した博士論文「接続表現の多義性に関する日韓対象研究: neunde と kedo を中心に」に加筆修正を行ったもので, 現代韓国語の接続表現「neunde」とその対応表現とされる日本語の kedo を対象に, 用例分析を通して両形式の使い分けと機能に考察を加えた論考である。

本書の構成は, 「序章」, 「第1章 韓国語の neunde と日本語の kedo」, 「第2章 分類基準」, 「第3章 neunde の解釈」, 「第4章 kedo の解釈」, 「第5章 neunde と kedo の類似表現」, 「第6章 接続表現の多義性」, 「終章」, 末尾に「参考文献」及び「索引」を付す。

なお, 本書は東京大学学術成果刊行助成制度による助成を受けている。(阿久澤弘陽)  
(2018年7月27日刊行 ひつじ書房刊 A5判横組み 184頁 5,200円+税 ISBN 978-4-89476-934-2)

### 真田信治著『地域・ことばの生態』

本書は, 真田信治氏の著作選集「シリーズ 日本語の動態」の、『標準語史と方言』(ひつじ書房, 2018年)に続く第2巻であり, 地域差, 社会差, 機能差などがさまざまに絡み合った日本語のバリエーションが注目されるようになった現状に鑑み, それと関連する氏の論考をまとめたものである。

内容は次のとおりである。「1 地域のロゴス」, 「2 ことばの変化のダイナミクス」, 「3 スタイルとしての「ネオ方言」」, 「4 スタイル切り換えの様相」, 「5 フィールドワークの方法」, 「6 関西方言の現在」, 「7 変容する大阪ことば」, 「8 世代とことば」, 「9 方言の意識化について」, 「10 ことばの社会的多様性」, 「11 新しい発話スタイルに対する評価」, 「12 方言研究における不易と流行」, 「13 「方言圏論」の陥穽を超えて」, 「14 〈書評〉添田建治郎著『日本語アクセント史の諸問題』」, 「15 方言研究の新たな出発」。末尾に「出典一覧」, 「あとがき」, 「索引」を付す。(田中佑)

(2018年7月29日発行 ひつじ書房刊 四六判横組み 172頁 1,600円+税 ISBN 978-4-89476-916-8)

### 半藤英明著『日本語基幹構文の研究』

本書は, 係助詞の関わる構文を日本語基幹構文と呼び, 主語, 取り立て, 題目などの文法項目について論じながら, 当該構文及びその周辺的な構文に考察を加えた論考である。

本書の構成は、「序文（仁田義雄）」、「序章 日本語の基幹構文」に続き、「第1章 主語と主体」、「第2章 「が」格の原理」、「第3章 述語と連用成分」、「第4章 現象文の諸相」、「第5章 現象文としての「写生文」」、「第6章 文法機能としての「取り立て」」、「第7章 表現構成素としての「題目」」、「第8章 真の題目と題目の範囲」、「第9章 「二部結合」の再考」、「第10章 判断文の諸相」、「第11章 判断文と疑問文の関わり」、「第12章 係助詞と疑問詞の関わり」。末尾に、「参考文献一覧」、「初出一覧」、「あとがき」、「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年8月8日発行 新典社刊 A5判縦組み 248頁 7,200円＋税 ISBN 978-4-7879-4304-0）

### 小林芳規著『平安時代の佛書に基づく漢文訓讀史の研究Ⅷ 加點識語集覽』

本書は、日本の諸寺等に現存する佛書の訓點本で、加點年時・伝授年時及び書写年次の全部またはその一部の識語を持つ訓點資料を集め、時代別の年月日順に掲載したものである。予定されている全十冊のうちの第八冊目となる。

本書は、奈良時代（八世紀）、平安初期（九世紀）、平安中期（十世紀）、平安後期（十一世紀）、院政期（十二世紀）の五つの時代に分けられ、構成されている。冒頭に「凡例」、末尾に「著者略歴」を付す。（前田直子）

（2018年8月10日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 570頁 17,000円＋税 ISBN 978-4-7629-3598-5）

### 山岡政紀・牧原功・小野正樹著『新版 日本語語用論入門——コミュニケーション理論から見た日本語——』

本書は、同著者らによって執筆された、『コミュニケーションと配慮表現——日本語語用論入門——（2010年刊行）』から、研究の要素を切り離した日本語語用論の入門用教科書である。

本書の構成は、「序章 本書を始めるに当たって」、「第1章 語用論の基礎」、「第2章 協調の原理」、「第3章 関連性理論」、「第4章 発話行為論」、「第5章 発話機能論」、「第6章 ポライトネス理論」、「第7章 日本語の配慮表現」で、各章の頭にイントロダクション・タスク、章中にタスク、章末に練習問題・ヒントが載せられている。末尾に、「あとがき」、「参考文献」、「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年8月10日発行 明治書院刊 A5判横組み 196頁 1,600円＋税 ISBN 978-4-625-70410-9）

### 川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編『移動とことば』

本書は、「移動」が常態化した今日において、多様な背景を持つ人々の生活を「移動」と「ことば」という二つの視点から捉え、移動性、複文化性、複言語性を持つ人の在り方を考察し探求することを目的として編まれた論文集である。

本書は、「序章 なぜ「移動とことば」なのか（川上郁雄）」に続く「第1部 移動の

中のことばとアイデンティティ」と「第2部 移動の中のことばとライフ」の二部構成。第1部には、「第1章 「ハーフ」の学生の日本留学——言語ポートレートが示すアイデンティティ変容とライフストーリー——（岩崎典子）」、「第2章 移動する青年のことばとアイデンティティ——オーストラリアで継承日本語を学ぶ学生の事例から——（倉田尚美）」、「第3章 日仏国際家族環境を背景に持つ日本語専攻修士の「移動」の経験と意味づけ（山内薫）」、「第4章 子どもたちが「移動しながら生きる自分と向き合う」授業実践——シンガポール日本人学校の事例から——（本間祥子）」、「第5章 外国につながる子どものキャリアデザイン——「国」「ことば」の認識との関わりに着目して——（人見美佳・上原龍彦）」が、第2部には、「第6章 国際結婚家庭2世代の「移動」と「選択」——母から娘の50余年間の軌跡をたどる——（三宅和子）」、「第7章 ある中国残留孤児の系譜——一世から四世までのインタビュー——（上田潤子）」、「第8章 移住者の語りに見られる「経験の移動」が示唆するもの——Agencyという観点から——（八木真奈美）」、「第9章 国境を超えたあるろう者のライフストーリー——ろう者にとっての「移動」と「ことば」——（大塚愛子・岩崎典子）」、「第10章 移動するパキスタン人ムスリム女性の青年期の言語生活（山下里香）」、「第11章 「移動する子ども」からモバイル・ライブズを考える（川上郁雄）」が収められている。末尾に、「展望討論 「移動とことば」研究とは何か（三宅和子・岩崎典子・川上郁雄）」、「あとがき モバイル・ライブズを生きて、研究する（三宅和子）」、「執筆者一覧」を掲載。（阿久澤弘陽）

（2018年8月15日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 304頁 3,200円+税 ISBN 978-4-87424-774-7）

### 今野真二著『『日本国語大辞典』をよむ』

本書は、筆者が国語辞書で最大規模の『日本国語大辞典』第二版を通読し、辞書や日本語をめぐる話題を展開するものである。

本書の構成は、「はじめに」、「序章」、「第一章 まず「凡例」をよむ」、「第二章 見出し」、「第三章 語釈について」、「第四章 使用例について」、「第五章 出典について」、「第六章 辞書欄・表記欄について」、「終わりに」。末尾に「附録」と「索引」を付す。

なお、本書第二章は、2017年2月12日から2018年7月1日まで「Sanseido Word-Wise Web（三省堂ワードワイズ・ウェブ）」にて連載していた36回分を再編集したものである。（阿久澤弘陽）

（2018年9月13日発行 三省堂刊 四六版縦組み 416頁 2,800円+税 ISBN 978-4-385-36506-0）

### 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実編『会話分析の広がり』

本書は、2012年9月の社会言語科学会（第30回研究大会）において「会話分析のスペクトラム——その広がりと可能性——」と題して開催されたワークショップを企画の母体とした、会話分析の広がりを捉えるために書かれた論考を集めた論文集である。

本書の構成は、「はじめに」と「トランスクリプトについて」に続き、「第1章 会話分析の広がり（平本毅）」、「第2章 連鎖組織をめぐる理論的動向（増田将伸）」、「第3章 会話分析から言語研究への広がり——相互行為言語学の展開——（横森大輔）」、「第4章 相互行為における身体・物質・環境（城 綾実）」、「第5章 会話分析とフィールドワーク——やりとりのしくみの解明と社会的世界の解明——（戸江哲理）」、「第6章 発話デザイン選択と行為の構成——精神科診療における処置決定連鎖の開始——（申田秀也）」、「第7章 認識的 Territories——知識・経験の区分と会話の組織——（早野薫）」、「第8章 会話分析と多言語比較（林誠）」、「第9章 会話分析はどこへ向かうのか（西阪仰)」。末尾に「索引」と「執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2018年9月18日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 300頁 3,600円+税 ISBN 978-4-89476-853-6）

### 横山詔一・杉戸清樹・佐藤和之・米田正人・前田忠彦・阿部貴人編『社会言語科学の源流を追う』

本書は、社会言語科学分野において新たな研究の流れを形づくっている研究活動と、同分野の源流として位置付けられる調査研究とを取り上げ、社会言語科学の新たな流れがどのような方向に向かっているのか、またどのような方向に向かうべきなのかを模索するきっかけを提供することを目的としたものである。具体的には、前者として「やさしい日本語」に関する研究が、後者として山形県舞鶴市における調査が取り上げられている。

『「シリーズ社会言語科学」刊行にあたって』、「まえがき」に続き、「第1部 言語問題の発見と対応」には「第1章 言語問題キーワード集（水野義道・御園生保子・佐藤和之・米田正人・伊藤彰則・前田理佳子・杉戸清樹・阿部貴人・森篤嗣による分担執筆）」、「第2章 「社会」を識別指標にする言語学——「やさしい日本語」と鶴岡調査のウェルフェアを考える——（佐藤和之）」が、「第2部 世界最長の実時間研究——鶴岡調査——」には「第3章 鶴岡調査から見る方言の将来（佐藤亮一・米田正人・水野義道・阿部貴人）」、「第4章 4個人の言語変化をつかむ（横山詔一・中村隆・阿部貴人・前田忠彦・米田正人）」、「第5章 共通語化のスピード（井上史雄）」が、「第3部 言語の大規模社会調査——地域・職場・学校社会での言葉の使い分け研究——」には「第6章 敬語調査、地域共通語調査、大都市言語調査、場面差調査（杉戸清樹・米田正人による分担執筆）」が、「第4部 経年調査（実時間研究）データの解析事例」には「第7章 言語の経年変化をロジスティック曲線で予測する（横山詔一）」、「第8章 反復横断調査とコホート分析（中村隆）」が、「第5部 鶴岡調査の研究資料」には「鶴岡調査データベース ver.2.0 解説（改訂版）」が収められており、末尾には「索引」、「執筆者紹介」が付されている。（田中佑）

（2018年9月18日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 296頁 3,900円+税 ISBN 978-4-89476-931-1）